

二分法的思考の性差および加齢による変化の検討

太田 仁*・吉野 伸哉**

Examination of Gender Differences in Dichotomy Beliefs and Age-related Changes

Jin OTA and Shinya YOSHINO

要 旨

本研究は、二分法的思考尺度の下位尺度である「二分法的信念」「損得思考」「二分法的選好」への年齢と性別の影響を検討することを目的とし、併せて Big5 の要素や幸福感、他者信頼度等の変数との関連性を検討することにより先行研究で示された人格障害等との関連性を検証することを目的に行われた。具体的には、75 歳以上の高齢者の年代では、その年代未満よりも二分法的思考傾向が高くなること（仮説 1）二分法的思考傾向は女性よりも男性の方が高いこと（仮説 2）を検証することを目的におこなわれた。

その結果、二分法的思考尺度の下位尺度各々と Big5 の各要素との有意な関連性が示された。特に神経症傾向との正の相関ならびに幸福感との負の相関が示されたことにより先行研究と一致する結果が得られた。

性別・年代の影響について、仮説 1 は年代別比較により 75 歳以上の年代が 65 歳未満、65 歳以上 74 歳未満の年代に比べて高くなっていったことから支持され、仮説 2 については、65 歳以上 74 歳未満でのみ有意な性差が確認されたことから部分的支持となった。

キーワード：二分法的思考、Big5、幸福感、加齢、性差

I 問 題

人が朝起きて眠るまで日常生活では個人の意思決定の連続である。個人をとりまく環境を認識するために分類し、意思決定におけるコストをできるだけ節約するために、その意思決定過程は基本的に単純化を求める動機や欲求を抱くことが指摘されている (Srull & Wyer, 1986) ¹⁾。

多様な要因が絡み合い、その状況も時間と共に複雑に変化する日常を単純に割り切って整思しようとする意思決定過程において究極の単純化は、2 つに分類することであり二分法的思考 (Dichotomous Thinking) といわれる。

1. 二分法的思考と関連概念

「白・黒」「善・悪」「all or nothing」といった、物事を二律背反なものとして思考する態度の極端化は、迅速な意思決定には有効であろう。しかし、二分法的思考に関する適用範囲や適用頻度、思考程度などには個人差があり、これまで二分法的思考は、否定的な側面について多くの報告がある。

例えば、二分法的思考に傾く気分障害にうつ病がある。抑うつ的になりやすい人には、「二分法思考」「拡大解釈」「過度の一般化」「マイナス思考」「自己関連づけ」などさまざまな認知の歪みに自動的に囚われる傾向が明らかにされている (Beck, Ruth, Shaw et al., 1979)²⁾。

Beck, A.T (1976)³⁾によると、人は個人が置かれている状況を絶えず主観的に判断し続けているが、その判断は半ば自動的にかつ適応的に行われることで日常生活が成立している。しかし、強いストレスを受けるなど特別な状況下では、その判断に偏りが生じ、非適応的な反応を示すことがある。その結果、抑うつ感や不安感が強まり、非適応的な行動が引き起こされ、さらに認知の歪みが強くなるという悪循環が生じるとしている。これらの自動思考は曖昧さを忌避し極端な判断に傾く認知の「全か無か」いわゆる all or nothing といわれる考え方である。物事を 100 点満点か 0 点かと極端に考える癖で、完全主義ということもできよう。完全主義は過度に高い目標基準を設定し、自分に厳しい自己評価を課し、他人からの評価を気にする性格である (Stoeber, Joachim et al., 2010)³⁾。このことから完全主義傾向の高い個人は、物事を成功 - 失敗という二分法的な理解をしやすいと説明できよう。具体的に、Shafraan, Cooper & Fairburn (2002)⁴⁾では、二分法的思考を完璧主義の維持要因として特定しており、さらに Cooper, et al (2004)⁵⁾により開発された摂食障害における二分法的思考尺度は、その後 Egan, Piek, Dyck and Rees (2007)⁶⁾により否定的な完璧主義との関連性を明らかにしている。

また、Dugas, Freeston & Ladouceur (1997)⁷⁾や Dugas, Gagnon, Ladouceur & Freeston (1998)⁸⁾は、不確実性や不寛容性が二分法的思考との関連を示す要因であることを特定している。このどちらの概念も、状況(環境)を脅威または不快感、不安、不一致の原因として認識または解釈する個人の傾向として定義されている (Grenier & Barrette, 2005⁹⁾)。

これらの報告では、個人はこの知覚された脅迫的な状況に一連の認知的、感情的、行動的反応の結果として二分法的思考が選択されることが示唆されている。二分法的思考と同様に曖昧さや不確実さをもたらす状況を脅威に感じることや、そのような状況における不快さや不安の程度を理解するための概念に、曖昧さ耐性 (Budner, 1962)¹⁰⁾ や不確実さ耐性 (Dugas, Freeston & Ladouceur, 1997)¹¹⁾ がある。

曖昧さ耐性は、現在直面する曖昧な状況への耐性を意味するのに対し、不確実さ耐性は将来に起きると予想される状況に対する耐性を意味する (Dugas, Gosselin & Ladouceur, 2001)¹²⁾。これら2つの概念は不確実な状況に在る人の情動的な反応とその対処する行動を合む概念であり思考スタイルを示す二分法的思考とはその点で異なる。

一方、また、二分法的思考は「物事を連続的な評価水準のなかで捉えることができず互いに排他的な二つのカテゴリに分けて評価する傾向がある」境界性人格障害との関連 (Beck Freeman & Associates, 1990)¹³⁾ や「自己に対する誇大な感覚が、自分自身や物事が秀でているか全く駄目で

あるかの択一的な思考に結びつく」自己愛性人格障害との関連が指摘されている (Beck et al., 1990)¹⁴⁾。Oshio (2009)¹⁵⁾ においても、二分法的思考と曖昧さ非耐性、完全主義、境界性人格傾向、自己愛傾向、他者軽視度との関連を明らかにされている。

上記の研究結果から人格障害は、日常の事象について感じたり、考えたり、行動する時のモチベーションとなる、ある一定の傾向や特徴とされる性格が前駆的な要因となることが予見されている。二分法的思考についても、性格特性と親和性が高いことから人格障害など精神的病理との関連が示唆されているといえよう。性格については様々な議論を経て、5つの要素から成る Big Five (Goldberg, 1990, 1992)¹⁶⁾ や Five Factor Model (McCrae & Costa, 1987)¹⁷⁾ モデルに収束されている。これらのモデルで示される性格を形成する5つの要素は Extraversion (外向性)、Agreeableness (協調性、調和性)、Conscientiousness (勤勉性、誠実性)、Neuroticism (神経症傾向、情緒不安定性)、Openness to Experience (Openness; 開放性) とされ、これまで多くの臨床心理学研究に応用されている。特に人格障害については5因子によって説明されており、Big5の構成要素である神経症傾向 (Neuroticism) が多くの人格障害の症状の強さを予測することが明らかにされている (Bagby, et al., 2005)¹⁸⁾ さらに神経症的傾向の高い人は、低い人に比べ主観的幸福感が低いとされている (門田・寺崎, 2005)¹⁹⁾ からも二分法的思考と個人の性格特性との関連性を明らかにすることは、二分法的思考と人格障害との関連性を構造的に理解し、心理社会的援助にも有用な知見を得ることとなると考えられる。

2. 認知の加齢変化

二分法的思考と対を成す概念に曖昧さ耐性がある。曖昧さ耐性は、曖昧な事態を好ましいものとして認知する傾向であり、精神的健康と結びつく適応的な特性として捉えられている (Budner, 1962)²⁰⁾ 友野 (2020)²¹⁾ は、20代・30代・40代・50代・60代と年齢を10歳ずつ年代の区切りで群分けして独立変数とし、曖昧さ耐性および過去に関する曖昧さ耐性をそれぞれ従属変数とした一元配置分散分析の結果、60代は他の年代に比べて概ね曖昧さ耐性および過去に関する曖昧さ耐性が高いこと、他の年代間では差がないことを明らかにし、その結果、曖昧さ耐性および過去に関する曖昧さ耐性ともに、年齢に比例して直線的に高まるのではなく、人生経験の熟成の結果であることを考察している。

Horn & Catts (1967)²²⁾ による流動性知能と結晶性知能の分類に基づく Schaie (2013)²³⁾ の縦断研究では、流動性知能に関わる処理速度や計算能力は60歳までに低下しはじめ、推論、空間定位、記憶は60歳代から低下しはじめること、結晶性知能に関わる言語能力は75歳頃まで維持されることが報告されている。

一方で、加齢によるうつ病は高齢者の精神疾患の中では認知症と並んで頻度が高いと考えられており (忽滑谷, 1999)²⁴⁾ 二分法的思考の促進要因として考えられよう。うつ病発症の具体的な要因としては、定年退職、引退、隠居等による地位役割の喪失、経済、財政の問題、健康の喪失、親しい人間 (配偶者や友人) を失ったり、交際が局限され仲間を失い、自立を失い、他者の庇護や援助を受けることが多くなる。さらに、やがて自己の生命の喪失の危機が迫ってくるのが、うつや不安を生じさせる可能性がある指摘されている (井原, 1993)²⁵⁾。これらの指摘は気に

かけてくれる人 (= ソーシャルサポート) の減少による精神的健康度の低下や幸福感の減少を示唆しているといえよう。

以上から二分法的思考は、ソーシャルサポートや精神的健康度ならびに幸福感と負の相関を示し、高齢者では二分法的思考が高くなることが予測される (仮説 1)。

3. 二分法的思考の性差について

Terracciano & McCrae (2001)²⁶⁾ は大部分の文化において、神経症傾向 (不安や怒り、抑うつなど否定的感情を経験しやすい傾向)、調和性、温かさ、感情に対する開放性においては男性より女性の方が、主張性やアイデアに対する開放性については女性より男性の方が全体的に高いことを見出している。ただし、神経症傾向の男女差については、感情的経験に対する女性の感受性の高さが影響しているという指摘があるため、感情に対する開放性等を統計的に統制したところ、男女差は縮小した結果の報告がある。しかしながら、二分法的思考の性差については、加齢との関連性を踏まえてこれまで十分に検討されていない。女性の方が男性よりも高いとされる特性は意思決定の柔軟性を示唆するものでもあり、反対に男性は意思決定について強固さが示唆されていることから二分法的思考傾向は女性よりも男性の方が高いことが予測される (仮説 2)。

II 方法

1. 調査の概要

調査期間：2018 年度 11 月～2019 年 2 月三重県民生児童委員研修会 (全回筆者が担当)

対象者属性：平成 30 年度 (2018) 三重県民生委員児童委員ブロック別研修会に出席した民生児童委員 4217 名 (2869 名分を回収 回収率 67.2% 2869 回答中不備のなかった調査票 1174 回答を分析対象とした)。

調査場所：平成 30 年度 (2018) 三重県民生委員児童委員ブロック別研修会場 (東員町、鈴鹿市、津市、松阪市、伊勢市、志摩市、名張市、御浜町の各会場にて実施)

調査方法：調査対象者 (全員民生児童委員) を研修会場に留め置き、回答後その場で回収

調査協力者の性別人数：男性 405 名女性 774 名合計 1174 名

年齢別分布：30 代 2 名 0.2%、40 代 17 名 1.5%、50 代 94 名 8.1%、60 代 588 名 50.4%、

70 代 462 名 39.6%、80 代 4 名 0.3% 平均年齢：66.3 歳 標準偏差 6.4

2. 質問紙の構成

- ・回答者の年齢・同居家族の有無・現在の就労状況
- ・現実肯定感の指標として、信頼感尺度 (天貝, 1995)²⁷⁾ より「対他的信頼 (他者信頼)」「ほとんどの人は基本的に正直である」「ほとんどの人は信頼できる」「ほとんどの人は基本的に善良で親切である」など 6 項目を抜粋
- ・現実肯定感の指標として、幸福感を尋ねる項目「非常に不幸 =0」～「非常に幸福 =10」で尋ねる 1 項目

- ・ソーシャルサポートの指標として、自分のことを気にかけてくれる人 1 項目「1 いない」から「5 たくさんいる」の 5 件法
- ・思考の柔軟性の指標として、対人的ストレスユーモアコーピング尺度（楳本・山崎, 2010）²⁸⁾ より「人前でけなされたら、けなされた内容にまつわる エピソード（逸話）をおもしろおかしく話す」「自分のみっともないところを人に見られたら、笑ってすませる」「お互いの考えが合わないときは、ユーモアを使って相手と衝突しないようにする」など 5 項目を抜粋「1 まったく行わない」～「5 いつも行う」5 件法
- ・精神的健康度の指標として、日本語版 Ten Item Personality Inventory（小塩ら, 2012）²⁹⁾ Big5; (Extraversion 外向性生)、(Agreeableness 協調性、調和性)、(Conscientiousness 勤勉性、誠実性) (Neuroticism 神経症、情緒不安定性)、(Openness 開放性) を各 2 項目で尋ねる 10 項目「1 全く違うと思う」から「7 強くそう思う」の 7 件法
- ・二分法的思考尺度 (Dichotomous Thinking Inventory: DTI (Oshio, 2009) ¹⁵⁾ 5 項目「1 全く当てはまらない」～「6 非常によく当てはまる」の 6 件法

III 結果

1. 各尺度記述統計

調査対象者（1174 名）の質問紙への回答を得て各々の尺度得点を以下のとおり算出した。

- ・信頼感尺度（天貝, 1995）については質問項目 6 項目の合計得点を尺度得点とした。
- ・幸福感を尋ねる項目については 1 項目の得点を尺度得点とした。
- ・自分のことを気にかけてくれる人については 1 項目の得点を尺度得点とした。
- ・対人的ストレスユーモアコーピング尺度（楳本・山崎, 2010）²⁹⁾ については質問項目 5 項目の合計得点を尺度得点とした。
- ・日本語版 Ten Item Personality Inventory (小塩ら, 2012)²⁸⁾ については尺度を構成する (Extraversion 外向性)、(Agreeableness 協調性、調和性)、(Conscientiousness 勤勉性、誠実性) (Neuroticism 神経症・情緒不安定性)、(Openness 開放性) 得点を（小塩ら, 2012）に準拠して算出し各得点とした。

2. DTI 記述統計と因子分析

・DTI (Oshio, 2009) ¹⁵⁾ については、因子分析後の 3 つの下位尺度の各 5 項目の合計得点を各々「二分法的信念」得点「損得思考」得点「二分法の選好」得点とした。

記述統計；各尺度の記述統計ならびに尺度の信頼を示す α 係数を Table1 に示す。

各尺度の各項目の平均値・標準偏差から天井効果およびフロア効果は認められなかった。下位尺度の α 係数については、各々 .7 を超えていた

Table 1. 各尺度記述統計量及び信頼性係数

	性別	n	mean	SD	α 係数
他者信頼度	男性	366	21.623	5.284	.775
min=6, max=30	女性	653	21.715	3.908	
幸福感	男性	387	7.129	1.635	—
min=0, max=10	女性	727	7.791	1.554	
気にかけてくれる人	男性	387	3.775	.761	—
min=1, max=5	女性	749	4.071	.665	
ユーモア コーピング	男性	375	12.611	3.319	.821
min=6, max=30	女性	715	13.060	3.552	
二分法的信念	男性	377	13.759	3.792	.755
min=6, max=30	女性	699	12.639	4.007	
損得思考	男性	369	20.347	4.435	.835
min=6, max=30	女性	689	18.798	4.541	
二分法の選好	男性	372	14.126	2.762	.712
min=6, max=30	女性	696	13.374	2.693	

ことから、上記算出に基づき以後の分析に用いた。

・DTI15項目の平均値を基に高得点順に配列した結果 (max=6)、6. 情報がウソか本当かをはっきりさせるべきだ (3.76) 3. 何が安全で何が危険なのかをはっきりさせたい (3.75) 7. 「どちらでもない」というあいまいな態度は嫌いだ (3.55) などの項目得点の平均値が3.5を超えていた (Table 2 参照)。

・DTI (Oshio, 2009) ¹⁹⁾ 因子各因子5項目で構成されることが明らかにされている。本研究においても、同様に3因子が抽出され原尺度の下位尺度名を付与し項目得点を合計して以下の分析に用いた。具体的に、第一因子は、“世の中には「成功者」と「失敗者」しか存在しない”や“全ての人は「勝ち組」と「負け組」に分かれると思うなどの項目で構成されていることから「二分法的信念 (Dichotomous Belief)」、第二因子は、“自分の役に立つ情報と役に立たない情報をはっきりさせたい” “何事も境界線をはっきりさせるとすっきり

する” 損 (不利益) 得 (利益主) 志向性を表していることから「損得思考」(Profit-and-loss Thinking)、第三因子は、“何事も好き嫌いをはっきりしたほうがうまくいく”や“あいまいなことも白黒はっきりさせるとうまくいく”など、物事を二つに分割して整理することで、理解がうまくいったり気分がすっきりしたりするという内容で構成されていることから「二分法の選好 (Preference for Dichotomy)」とした (Table 3 参照)。

3. DTI 下位尺度と関連変数との相関

二分法的意思決定のスタイルが個人の認知や現実肯定感との関連性を検討するため、DTI 下位尺度と関連変数との相関係数を算出した (Table 4 参照)。

二分法的信念は、気にかけてくれる人、幸福感、外向性、協調性、他者信頼度と有意な負の相関を示し、神経症傾向と正の相関を示した。

損得思考は、気にかけてくれる人、幸福感、他者信頼度と有意な負の相関を示し、勤勉性、神経症傾向と有意な正の相関を示した。

Table 2. 二分法的思考尺度 平均・標準偏差 (DTI)

質問項目	mean	SD
6. 情報がウソか本当かをはっきりさせるべきだ	3.76	1.139
3. 何が安全で何が危険なのかをはっきりさせたい	3.75	0.989
7. 「どちらでもない」というあいまいな態度は嫌いだ	3.55	1.079
10. ものごとが「良いこと」か「悪いこと」かを明確にしたい	3.48	1.068
12. 自分の役に立つ情報と役に立たない情報をはっきりさせたい	3.3	1.001
1. 何事も好き嫌いをはっきりしたほうがうまくいく	3.28	0.882
13. 何事も境界線をはっきりさせるとすっきりする	3.09	0.998
4. あいまいなことも白黒はっきりさせるとうまくいく	3.05	0.925
9. 自分にとって得なのか損なのかをはっきりさせたい	2.9	0.958
11. すべての問題には「正解」と「不正解」が存在するものだ	2.88	1.015
15. 勝負は白黒はっきりと決着をつけるのがよい	2.86	1.124
8. 人間は「善人」と「悪人」にはっきりと分けることができる	2.62	0.955
14. すべての人は私の「敵」か「味方」のどちらかだと思う	2.54	1.55
5. 全ての人は「勝ち組」と「負け組」に分かれると思う	2.52	0.963
2. 世の中には「成功者」と「失敗者」しか存在しない	2.45	0.955

n=1018 min=1max=6

Table 3. DTI 因子分析結果

二分法的思考尺度 (DTI) 質問項目	二分法的信念	損得思考	二分法の選好
010-5 全ての人は「勝ち組」と「負け組」に分かれると思う	0.803	-0.054	0.039
010-2 世の中には「成功者」と「失敗者」しか存在しない	0.773	-0.126	-0.026
010-8 人間は「善人」と「悪人」にはっきりと分けることができる	0.586	0.197	0.002
010-11 すべての問題には「正解」と「不正解」が存在するものだ	0.419	0.411	-0.002
010-14 すべての人は私の「敵」か「味方」のどちらかだと思う	0.389	0.195	-0.075
010-12 自分の役に立つ情報と役に立たない情報をはっきりさせたい	-0.008	0.810	-0.055
010-13 何事も境界線をはっきりさせるとすっきりする	0.143	0.655	0.047
010-10 ものごとが「良いこと」か「悪いこと」かを明確にしたい	-0.106	0.622	0.256
010-9 自分にとって得なのか損なのかをはっきりさせたい	0.273	0.553	-0.010
010-15 勝負は白黒はっきりと決着をつけるのがよい	0.298	0.406	0.057
010-4 あいまいなことも白黒はっきりさせるとうまくいく	0.299	-0.141	0.689
010-3 何が安全で何が危険なのかをはっきりさせたい	-0.163	0.121	0.633
010-7 「どちらでもない」というあいまいな態度は嫌いだ	0.014	0.172	0.430
010-1 何事も好き嫌いをはっきりしたほうがうまくいく	0.168	-0.075	0.427
最尤法, Promax回転後の因子パターン n=1032	因子間相関	-	0.565 0.453
			- 0.656

二分法的選好は、勤勉性と開放的に有意な正の相関を示した。

ユーモアコーピングについては、DTIの各下位尺度との間に有意な関連性は認められなかった。

4. 年齢・性差の二分法的思考への影響

DTI 各下位尺度評定に与える性差と年齢の影響について検討するため分散分析を行った。

分散分析の結果、交互作用が有意でなかったため二分法的思考各下位尺度の得点について性差と年代別の単純主効果の検定を行った。(Fig1 Fig2 Fig3 参照)

Table 4. 二分法的思考とBig5ならびに関連変数との相関

年代	二分法的信念	二分法的損得思考	二分法的選好	外向性	協調性	勤勉性	神経症	開放性	ユーモアコーピング	気にかけてくれる人	他者信頼度	幸福度
年代	-.101**	.082**	.101**	-.047	.006	.121**	-.049	.008	-.048	-.045	.029	-.066*
二分法的信念	—	.643**	.430**	-.066*	-.150**	.033	.109**	.001	-.008	-.131**	-.096**	-.202**
損得思考		—	.637**	-.023	-.033	.065*	.081**	.048	.012	-.097**	-.071*	-.127**
二分法的選好			—	.052	.006	.127**	-.025	.135**	.032	-.031	-.046	-.024
外向性得点				—	.004	.141**	-.228**	.284**	.222**	.256**	.074*	.200**
協調性得点					—	.170**	-.264**	-.057	.072*	.180**	.125**	.224**
勤勉性得点						—	-.209**	.157**	-.103*	.097**	-.014	.107**
神経症傾向得点							—	.171**	-.035	-.134**	-.101**	-.197**
開放性								—	.129**	.117**	.024	.138**
ユーモアコーピング									—	.147**	.158**	.152**
気にかけてくれる人										—	.172**	.349**
他者信頼度											—	.220**
幸福度												—

**p<.01 *p<.05 n=1065

Fig 1. 二分法的信念の年代別*性差

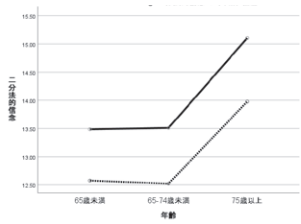


Fig 2. 損得思考の年代別*性差

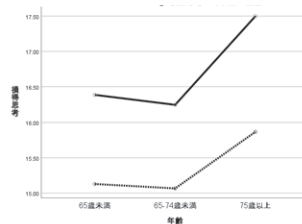
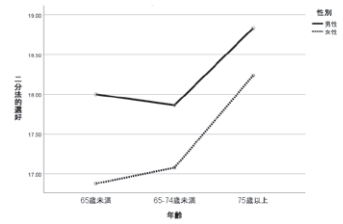


Fig 3. 二分法的選好の年代別*性差



年代別の差 (Table5 参照)

年代別の差の検討を行うために、各年代 (65 歳未満、65 歳 -74 歳未満、75 歳以上) を独立変数、DTI 各下位尺度を従属変数として一要因の分散分析を行った結果有意であったことから多重比較(Tukey の HSD 法)を行ったところ、各下位尺度とも 75 歳以上が 65 歳未満・65 歳 -75 歳未満よりも有意に高い得点を示した (二分法的信念 ;F (3,1067) =3.40 p<.05 損得思考 ;F (3,1067) =3.40 p<.05 二分法的選好 ;F (3,1045) =3.40 p<.05)。

年代別性差 (Table 6 参照)

男女差の検討を行うために、二分法

Table 5. 二分法的思考年代間の差

	65歳未満		65-74歳未満		75歳以上		F値 (df)	多重比較
	mean	SD	mean	SD	mean	SD		
二分法的信念	12.71	4.39	15.32	3.78	17.05	3.06	9.38(2,1064)	65歳・65歳-74歳未満<75歳以上*
損得思考	12.91	3.78	15.52	3.95	17.38	3.44	5.71(2,1054)	65歳・65歳-74歳未満<75歳以上*
二分法的選好	14.64	3.82	16.85	4.05	18.59	3.69	7.02(2,1048)	65歳・65歳-74歳未満<75歳以上*

*p<.005

Table 6. 二分法的思考年代別性差

	n	男性		女性		t値	p値		
		mean	SD	mean	SD				
65歳未満	二分法的信念	39	13.49	3.91	220	12.58	4.47	1.193	0.234
	損得思考	39	16.38	4.17	217	15.13	3.68	1.921	0.056 †
	二分法的選好	39	18.00	3.38	213	16.88	2.97	2.120	0.035 *
65-74歳	二分法的信念	278	18.00	3.38	431	16.88	2.97	3.426	0.001 **
	損得思考	271	16.24	3.82	434	15.07	3.97	3.885	0.000 ***
	二分法的選好	276	17.86	3.38	431	17.08	3.45	2.977	0.003 **
75歳以上	二分法的信念	58	15.10	3.64	41	13.98	4.02	1.455	0.149
	損得思考	58	17.50	3.77	38	15.87	4.31	1.959	0.053 †
	二分法的選好	54	18.83	3.31	38	18.24	4.19	0.762	0.448

†p<0.1,*p<0.05,**p<0.01,***p<0.001

的思考各下位尺度得点について t 検定を行った。その結果、65 歳未満では、損得思考では男性の方が女性よりも高い有意な傾向 ($t = 1.92, df = 257, p < .056$)、二分法的選好については、男性の方が女性よりも有意に高い得点 ($t = 2.12, df = 250, p < .003$) を示していた。

65 歳 -74 歳未満では、二分法的信念 ($t = 3.42, df = 707, p < .0001$)、損得思考 ($t = 3.88, df = 703, p < .000$)、二分法的選好 ($t = 2.97, df = 705, p < .003$) について、男性の方が女性よりも有意に高い得点を示していた。

75 歳以降では、損得思考 ($t = 1.95, df = 94, p < .053$) について、男性の方が女性よりも高い有意な傾向を示していた。

5. Big5 の性差・年代差

Big5 の構成要素を従属変数とする性別・年代の影響を検討するために分散分析を行ったが口語作用による影響は見られなかったため、性差と年代別の各々の主効果の検討を行った結果、性差を検討するために Big5 各要素特定について ($t(1099) = .607, < .001$) で男性より女性の方が有意に高い得点を示していた。他の Big5 の要素については有意な性差は認められなかった。

次に年代を独立変数、Big5 各要素を従属変数とした分散分析を行った。その結果勤勉性得点において年代間の有意な差がみられた ($F(2, 1089) = 8.146, p < .001$)。多重比較 (Tukey の HSD 法) を行ったところ 75 歳以上 >65 歳以上 74 歳未満 >65 歳未満という結果が得られた。他の Big5 の要素については年代間の差は認められなかった。

IV 考 察

本研究は、二分法的思考に関するこれまでの研究を追認しつつ、加齢と性差の影響を検討することを目的とした。具体的には、Oshio (2009)¹⁶⁾「の DTI 下位尺度と精神的健康度、ソーシャルサポート、幸福感との関連性をこれまでの研究に準拠し検討し、性差と年齢の影響について仮説を検証した。

DTI 尺度は因子分析の結果 Oshio (2009)¹⁶⁾ で示された 3 因子構造であることが確認され、各々の因子に含まれる項目についても同様であった。3 因子を下位尺度として Big5 等の変数の相関から「二分法的信念」は、Big5 の要素である外向性や協調性と負の相関を示し、神経症傾向と正の相関を示した。また、および「気にかけてくれる人」「幸福感」「他者信頼度」とは負の相関を示したことから社会的疎外感による他者不信が神経症傾向を伴い、二分法的思考に至っていることが示唆され、先行研究における神経症傾向との関連についての結果と一致する。

「損得思考」については、Big5 の要素である勤勉性と神経症傾向と正の相関を示し、「気にかけてくれる人」「幸福感」「他者信頼度」と負の相関を示した結果については正の相関を示した。勤勉性は、忠実に行動する傾向、達成を目指す傾向、自発的な行動よりも計画的な行動を好む傾向を表しており高い誠実性は、個人の意思決定に固執する頑迷さと理解できよう。

また、上記「二分法的信念」と「損得思考」で示された、神経症傾向 (正の相関)・幸福感 (負の相関) の有意な関連性 (Table 4 参照) については、神経症的傾向の高い人は、低い人に比べ

主観的幸福感が低いとされる門田・寺崎（2005）^{20）}の知見と一致する。

二分法的選好は、「勤勉性」と「開放性」との間に正の相関を示した結果について二分法的選好は事象について、安全・危険や、好き嫌いといった二分割が理解を助けたり、すっきりしたりするという内容で構成されていることから本調査対象者である民生児童委員としての役割から困窮する地域住民の問題解決にあたり、粘り強く、多様な方法で解決に結びつけるために事象を単純化する二分法が選好されていると考えられよう。

以上から二分法的思考は Big5 の要素である神経症的傾向と親和性を有しながらも、その構造から社会的問題解決における意思決定に有用な方略として採用されることが示唆されていると考えられよう。

性別と年齢の二分法的思考への影響については、分散分析の結果交互作用は認められなかったが単純主効果の検定において、年代別では、二分法的各尺度得点は 75 歳以上の年齢が他の年齢よりも有意に高い得点を示していたことから仮説 1 は支持された。

また、年齢別性差においては、65 歳以上 74 歳未満の年代で、各尺度得点とも女性よりも男性の方が有意に高い得点が示されたが、他の年齢代では、損得思考に有意傾向が見られたものの有意な差は認められなかったことから仮説 2 は部分的に支持された。このことは、65 歳以上男女において生理的の老いについて差は実感されないものの、多くの男性が定年退職により役割が減衰し、それと呼応して家族的役割においても立場が脆弱になることにより認知的柔軟性が失われるといった背景が予測される。こういった影響要因について実証するために今後は、各年代集団のコホート研究が必要であろう。

参考文献

- 1) Srull, T. K., & Wyer, R. S., Jr. (1986). The role of chronic and temporary goals in social information processing. In R. M. Sorrentino & E. T. Higgins (Eds.), *Handbook of motivation and cognition: Foundations of social behavior* (pp. 503-549). Guilford Press.
- 2) Beck AT, Ruth, A.J, Shaw, B.F, 1979 Cognitive Therapy of Depression. New York:Guilford.
- 3) Beck, A. T., Freeman, A., & Davis, D. D. (1990). *Cognitive therapy of personality disorders*. New York: The Guilford Press
- 4) Shafran, R., Cooper, Z., & Fairburn, C. G. (2002). Clinical perfectionism: A cognitive-behavioural analysis. *Behaviour Research and Therapy*, 40, 773-791.
- 5) Cooper, Z., Fairburn, C. G., & Hawker, D. M. (2004). *Cognitive-behavioral treatment of obesity: A clinician's guide*. New York: Guilford Press.
- 6) Egan, S. J., Piek, J. P., Dyck, M. J., & Rees, C. S. (2007). The role of dichotomous thinking and rigidity in perfectionism. *Behaviour Research and Therapy*, 45, 1813-1822.
- 7) Dugas, M. J., Freeston, M. H., & Ladouceur, R. (1997). Intolerance of uncertainty and problem orientation in worry. *Cognitive Therapy and Research*, 21, 593-606.
- 8) Dugas, M. J., Gagnon, F., Ladouceur, R., & Freeston, M. H. (1998). Generalized Anxiety Disorder: A preliminary test of a conceptual model. *Behaviour Research and Therapy*, 36, 215-226.
- 9) Grenier, S., Barrette, A. M., & Ladouceur, R. (2005). Intolerance of uncertainty and intolerance of ambiguity: Similarities and differences. *Personality and Individual Differences*, 39, 593-600.

- 10) Budner, S. (1962) . Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of Personality*, 30, 29-
- 11) Dugas, J.Freeston M H& LadouceurR.1997) Intoleranceof uncertainty and problem orientation inworry . *Cognitive Therapy and Research* 21 593-606.
- 12) Dugas, M. J., Gosselin, P., & Ladouceur, R. (2001b) . Intolerance of uncertainty and worry: investigating specificity in a nonclinical sample. *Cognitive Therapy and Research*, 25, 551-558.
- 13) Beck, A. T., Freeman, A. , & Associates (1990) . *Cognitive Therapy of Personality Disorders*. New York: The Guilford Press.
- 14) 小塩真司 (2010) 二分法的思考尺度 (Dichotomous Thinking Inventory) の特徴 —これまでの検討のまとめと日常生活で重視する事柄との関連— 中部大学人文学部研究論集 (23), 45-57
- 15) Oshio, A. (2009) . Development and validation of the dichotomous thinking inventory. *Social Behavior and Personality: An International Journal*, 37, 729-742.
- 16) Goldberg, L. (1990) . An alternative "Description of Personality" The big-five factor structure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 1216-1229.
 ・ Goldberg, L. (1992) . The development of markers for the Big -Five factor structure. *Psychological Assessment*, 4,26-42.
- 17) McCrae, R. R., & Costa, P. T., Jr. (2008) The five-factor theory of personality. In O. P. John, R.W . Robins, & LA. Pervin (Eds.), *Handbook of personality: Theory and research*. 3rd ed. New York: The Guilford Press. pp159-181.
- 18) Miller, J. D., Bagby, R. M., & Pilkonis, P. A. (2005) . A comparison of the validity of the Five-Factor Model (FFM) Personality Disorder Prototypes using FFM self-report and interview measures. *Psychological Assessment*, 17 (4), 497-500.. A comparison of the validity of the Five-Factor Model (FFM) Personality Disorder Prototypes using FFM self-report and interview measures. *Psychological Assessment*, 17 (4), 497-500.
- 19) 門田昌子・寺崎正治(2005) パーソナリティと主観的 幸福感との関連—対人相互作用におけるソーシャル・スキルの役割— 川崎医療福祉学会誌 ,15, 67-74.
- 20) Budner, S. (1962) . Intolerance of ambiguity as a personality variable *Journal of Personality*, 30, 29-50.
- 21) 友野勝成 (2020) *Bulletin of Miyagi Gakuin Women's University* (130), 33-45, 2020-06.
- 22) Horn, J. L., & Cattell, R. B. (1967) . Age differences in fluid and crystallized intelligence. *Acta Psychologica*, 26, 107-129.
- 23) Schaie, K.W. (2013) *Developmental influences on adult intelligence: The Seattle Longitudinal Study* (2nd ed.) . New York:Oxford University Press.
- 24) 忽滑谷和孝 (1999) 老年期気分障害の疫学 . *老年精神医 雑誌* 10 (8) : 910-916.
- 25) ・井原一成 (1993) 地域高齢者の抑うつ状態とその関連要因に関する疫学的研究 . *日本公衆衛生雑誌* ; 40 (2) : 85-94.
- 26) Paul T. Costa Jr., Antonio Terracciano, and Robert R. McCrae (2001) Gender Differences in Personality Traits Across Cultures: Robust and Surprising Findings *Journal of Personality and Social Psychology* 2001. Vol. 81. No. 2. 322-331.
- 27) 天貝由美子 (1995) 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 *教育心理学研究* ,43,364-371.
- 28) 楳本知子・山崎勝之(2010) 対人ストレスユーモア対処尺度(HCISS) の作成と信頼性, 妥当性の検討 1 パーソナリティ研究第 18 巻第 2 号 96-10.
- 29) 小塩真司・阿部晋吾・カトローニ ピノ (2012) . 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI - J) 作成の試み パーソナリティ研究 , 21, 40-52.

Abstract

The purpose of this study was to examine the effects of age and gender on the subscales of the Dichotomous Thinking Inventory (DTI) ; “dichotomous beliefs,” “profit-and-loss thinking,” and “preference for dichotomous.” In addition, by examining the relationship with the Big Five personality traits and variables such as happiness and trust in others, it aimed to verify the relationship with personality disorders and others shown in previous studies.

Specifically, it was intended to test the following hypotheses: (1) the tendency to dichotomous thinking would be higher in the elderly age group of 75 years and older than in the younger age group (hypothesis 1) , and (2) the tendency to dichotomous thinking would be higher in males than in females (hypothesis 2) .

The results showed that each subscale of the DTI was significantly related to each factor of the Big Five. In particular, positive correlations with neuroticism and negative correlations with happiness were found, which are consistent with previous studies.

Regarding the effect of gender and age, hypothesis 1 was supported by the fact that the age group of 75 years and older was higher than the age groups of less than 65 years and 65 to 74 years according to the comparison by age, and hypothesis 2 was partially supported by the fact that a significant gender difference was confirmed only in the age group of 65 to 74 years.

Keywords: dichotomous thinking, Big Five, happiness, aging, gender difference